

中国人上級日本語学習者の OPI から見るプロフィシエンシー

楊 帆（海南大学）

キーワード：OPI、中国人上級学習者、スピーチレベル、文構造の呼応、中国語語彙

1. はじめに

日本語 OPI は、日本語学習者の口頭能力、すなわちプロフィシエンシーを測るための重要な方法として、すでによく知られ、応用されている。その中で、学習者の口頭能力は初級、中級、上級、超級の4大レベルに分けられている。一般的に、日本語学習において、学習者の口頭能力は学習時間と使用頻度の増加にしたがって、初級から中級へ、さらに中級から上級へとレベルアップしていく。しかし、上級を突破して超級レベルになることは、なかなか容易なことではない。上級日本語学習者の日本語口頭能力をいかに向上させるかということは、彼らに対する日本語教育において大きな課題である。本発表では上級日本語学習者の OPI データに基づいて、口頭表現におけるパターン化した問題点を考察し、口頭能力の向上を目指す、上級学習者向けの日本語教育にフィードバックすることを目的とする。

2. 上級学習者の口頭運用能力

ここで改めて ACTFL-OPI 試験管養成要マニュアル（1999）の記述を引用して、OPI 上級学習者の口頭運用能力について振り返ってみることにする。

- ① 総合タスクと機能：主な時制の枠組みの中で、叙述したり、描写したりすることができ予期していなかった複雑な状況に効果的に対応できる。
- ② 場面／話題：ほとんどのインフォーマルな場面といくつかのフォーマルな場面／個人的・一般的な興味に関する話題。
- ③ 正確さ：母語話者でない人との会話に不慣れな聞き手でも、困難なく理解できる。
- ④ テキストの型：段落

というように、上級日本語学習者はかなり高度な日本語口頭運用能力を持っており、外国人の日本語に慣れていない日本人との交流もほとんど問題がなくできる。しかし、上級学習者としてやはりなかなか容易に突破できない難関がある。上級日本語学習者のパターン化した問題点を明らかにすることができれば、それらに対して効果的な指導法を生かすことによって、日本語プロフィシエンシーの向上の助力になることが期待できる。

3. データについて

筆者は日本語 OPI のテスターとして、2017 年から海南大学日本語専攻ボランティアの学部生と大学院生に対して OPI を行った。本発表は 30 名の上級学習者の約 900 分のデータを分析してまとめたものである。OPI は、テスターと被験者がお互いに知らないことを前提にしているため、行った時期は新学年が始まってからの 2 週間以内にし、テスターと被験者の初対面の会話を保証した。30 名の上級日本語学

習者の口頭レベルは、上級の上3名、上級の中17名、上級の下10名である。

4. 結果と考察

30名の上級日本語学習者のデータについて分析した結果、いわゆる上級レベルに達しても、会話において依然として問題が残っている。その中で学習者各自の日本語レベルと言語習慣によるものもあるが、学習者間共通の問題点も存在している。本発表では、(1) 不適切なスピーチレベル、(2) 不適切な文構造の呼応、(3) 中国語語彙の使用、の3点について以下のようにまとめた。

4. 1 不適切なスピーチレベル

30名の学習者のうち、17名に不適切な文末のスピーチレベルの使用が見られた。具体的に言えば、初対面の人、且つ目上の人に対して、敬体（です・ます体）を使用すべきところで、普通体を多く使用していることである。この17名の学習者のうち、特に2名においてその傾向が目立ったので、表1で用例を示す。

表1 不適切なスピーチレベルの使用例

	使用例	回数		使用例	回数
	学習者 A	～じゃない。		5	学習者 B
～ではない。		2	～ではない。	2	
～ない。		2	～見えない。	2	
～忙しくない。		2	～わからない。	1	
～わかんない。		1	～終わってない。	1	
～ある。		1	～高くない。	1	
～あった。		1	～寒くない。	1	
～なった。		1	～使っている。	1	
～乗った。		1	～暖かくなる。	1	
～見てる。		1	～歩いていく。	1	
～行く。		1	～する。	1	
			～だった。	1	
合計		18	合計	17	

表1に示されたとおり、たった30分の会話において、2人とも「です・ます」体の代わりに、不適切な文末のスピーチレベルを多く使用している。使用例を見ると、文末が名詞である「だった」の1例のほか、すべて動詞か形容詞であった。特に「ない」で終結する例が目立ち、20例もあった。ほかの学習者については、以上の例のほか、「～見てる」、「～やってる」、「～しちゃった」、「～わかんない」といった口語的な言い方も見られた。

学習者が日本語を習い始めたときは「です・ます」体で始まるのだが、ある時期を経つと、普通体が導入される。長年の教育経験から感じたことではあるが、普通体を最初に習い始めたときはなかなか慣れず、親しい友達やクラスメートと雑談するときでもつい「です・ます」体を使ってしまう。これについては、鎌田（2017）の中級学習者の口語特徴についての記述でも触れている。すなわち、非常に親しい友達とでも、文末では「です・ます」体や、「～てください」などの形を使用している。一方、大量の自然な日本語会話がインプットされ、普通体に慣れたら、その言語形式が簡単で話しやすいため、このような表現を次第に多く使用し、さまざまな会話場面、たとえ目上の人と話すときでも応用してしまう。しかし、日本語と英語、あるいは中国語との顕著な違いの1つは、異なる相手、異なる場面において、文末表現の使い分けで敬意、距離感、親しみなどの心的活動を表すことである。ときどき、同じ人に対

しても、異なる場面において言葉や文末表現を適宜変えることによって、当時の話す内容や話者の心的状況などを表す。日本語では、このような現象を「スピーチレベルシフト」(三牧、1993;宇佐美、1995;佐藤、2000等)という。教師としては、日々の教育において、この現象を学習者に紹介したり、文末のスピーチレベルの不適切な使用によって会話にマイナス効果をもたらすことになるということを強調したり、学習者の不適切なスピーチレベルの使用があったら適切に注意、訂正したりすべきだと思われる。

OPIを行った後、筆者は何人かの学習者に個人的にインタビューをした結果、表3における学習者A、B、それからもう数人の学習者に共通点があることに気づいた。それは、彼らはみな日本のドラマやアニメを見るのが好きだということである。彼らはドラマやアニメで大量の普通体の表現を耳にし、自然で、生な日本語だと思い、わざわざ真似をしており、日常会話に応用しているとのことである。しかし、彼らはスピーチレベルシフトという現象を見落とし、不適切なスピーチレベルは聞き手に不快感をもたらすことについて十分に意識せず、その結果、会話やコミュニケーションにマイナス効果をもたらしてしまう。教師はこのような不適切な使用を意識させ、適宜訂正すれば、プロフィシエンシーの向上に役立つはずである。

4. 2 不適切な文構造の呼応

日本語学習の初級段階でしばしば耳にするのは趣味についての会話練習である。「趣味は何ですか。」に対して、「趣味はサッカーをします」などと返した学習者は少なくないだろう。この主部と述部の呼応問題は当然初級と中級段階でよく発生するが、上級になったら発生しないかという、そのように簡単に結論づけられないようである。30名のOPIデータのうち、12名に文構造の呼応問題が見られた。具体的に見られたのは、上で述べた主部と述部の呼応の問題(13例)、原因と結果文の呼応問題(12例)、疑問文の呼応の問題(7例)である。それぞれの代表例は表2に示されたとおりである。

表2 不適切な文構造の呼応の例

主部と述部の呼応	原因と結果の呼応	疑問文の呼応
① 日本へ行った理由は、日本語を <u>学びます</u> 。 → 学ぶことです。	① なぜかという、建物の計画を <u>検討しなければなりません</u> 。 → 検討しなければならないからです。	① <u>どこが自分の故郷で一番有名な</u> のは、太平街です。 → のかという
② 私がやりたい仕事は、外国語を <u>滑らかに話さなければならない</u> 。 → 話す仕事です。	② なぜなら、友人と連絡したりする <u>ことができます</u> 。 → できるからということです。	② なぜゴミの分別を <u>しなければならない</u> のは、リサイクルしやすくなるからです。 → のかという

上述のような文構造の呼応問題があっても、コミュニケーションに大きな支障をきたさず、意思疎通に特に影響を与えないだろう。しかし、これらの問題は意識して直さなければ、時間が経っても簡単に消えない。教師として前項と後項の呼応関係を学習者に意識させることは重要である。ときには、わざわざ文を書かせる練習などして気づきを促す方法が効果的だと考えられる。

4. 3 中国語語彙の使用

本発表で言及している中国語語彙の使用とは、該当意味の日本語語彙を知らないため、日本語の音読みをそのまま中国語語彙に当てて言うてしまうことである。具体例は表3に示された28例である。30

名の上級学習者のうち、16名にこの現象が見られた。

表3 中国語語彙の使用

誤用	正用	誤用	正用
動漫 (どうまん)	アニメと漫画	发源地 (はつげんち)	発祥地
省会 (しょうかい)	県庁所在地	一本 (いっぽん)	本科一類入学
五環 (ごかん)	5 番目環状線	二本 (にほん)	本科二類入学
上学期 (じょうがつき)	先学期	意思 (いし)	意味
合格线 (ごうかくせん)	合格点	新闻系 (しんぶんけい)	ニュースメディア専攻
波音 (ボーイン)	ボーイング	国际形势 (こくさいけいせい)	国際情勢
一局 (いっきょく)	ワンプレイ	发炎 (はつえん)	炎症を起こす
药性 (やくせい)	薬物性質	上火 (じょうか)	ヘルペスができる
膏药 (こうやく)	湿布	主业 (しゅぎょう)	本務
天然气 (てんねんき)	天然ガス	绩点 (せきてん)	GPA
私家车 (しかしゃ)	自家用車	轮子 (りんし)	車輪
お米の粉 (こめのふん)	お米のこな	广东省 (こうとうしょう)	かんとん省
楚文化 (そぶんか)	楚の国の文化	新芽 (しんが)	しんめ
明朝 (めいちょう)	みんなの時代	敌人 (てきにん)	てき/かたき

上述の不適切なスピーチレベルや、文構造の呼応問題は国別と関係なく、上級学習者に存在している中間言語の痕跡なら、本節における中国語語彙の使用は中国人学習者特有の問題だと言える。中国語と日本語に同じく漢語語彙が存在し、どの漢字も対応している日本語の読み方があるため、中国人学習者に言語学習に正の干渉がある一方、負の干渉ももたらした。要するに、表3に示された、正確な語彙を知らない場合、中国語の語彙にそのまま日本語の漢字の発音を当てて言うことになる。渡日経験がなく、自然な日本語環境に触れたことのない大多数の学習者にとって、いかに自然な言葉を使い会話をするかということは大きな課題である。日々の学習において語彙量を増やすことは無論必要だが、日本のドラマやアニメのほか、NHK ニュース、インタビュー番組、トーク番組、ドキュメンタリー番組などを見ることによって、さまざまな場面における日本語に触れることも必要だろう。教師としては、なるべく学習者に話す機会を与え、随時言葉遣いの自然さについて注意すべきである。

主要参考文献

- [1] 宇佐美まゆみ (1995) 「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能」, 『学苑』 662:27-42.
- [2] 鎌田修 (2017) 「上級日本語学習者に残る中間言語的特徴—文末表現の習得に絡めて—」, 『日本語学』 (2) : 58-69.
- [3] 鎌田修・嶋田和子・迫田久美子 (2008) 『～真の日本語能力をめざして～プロフィシエンシーを育てる』 凡人社.
- [4] 牧野成一・鎌田修・山内博之・齋藤真理子・荻原稚佳子・伊東とく美・池崎美代子・中島和子 (2001) 『ACTFL OPI 入門』 アルク.
- [5] 牧野成一監修, 日本語 OPI 研究会 (1999) 『ACTFL-OPI 試験官養成用マニュアル』 東京: 株式会社アルク.
- [6] 三牧陽子 (1993) 「談話の展開標識としての待遇レベル・シフト」, 『大阪教育大学紀要』 第 I 部門, 42 (1) : 39-51.
- [7] 佐藤勢紀子 (2000) 「日本語の談話におけるスピーチレベルシフトの機構」, 平成 10 年度～平成 11 年度文部科学研究費補助金基盤 (C) (2) 日本語の談話におけるスピーチレベルシフトの機構とその指導法, 課題番号 10680302.
- [8] 曹娜 (2016) 「ACTFL-OPI 在日本日语教育界的应用对中国的借鉴意义分析」, 『日语学习与研究』, 48-56.
- [9] 管秀兰 (2013) 「建构主义理论在日语口语教学中的应用实践研究—基于与 OPI 日语口语教学模式的结合」, 『日语学习与研究』 3:62-69.